

いじめの温床を醸成せぬ教育

4年前、地元大津の中学校で、友人からのいじめが原因で自殺事件が発生し、担任教師や校長の無責任な対応、教育委員会制度の様々な問題点等が明らかになり、全国的に大きな波紋を広げたことは記憶に新しい。だがこの事件をきっかけに、その後このいじめ問題が大きく改善されたかと言えば、残念ながらそのようになってはいないと断じざるを得ない。

学校という閉鎖社会において、陰湿なこのいじめをどのように防ぐのか、未来ある若者たちをどのようにして守るのか、我々すべてに課せられた極めて重要な課題であろう。

このような問題意識の中、去る8月の産経新聞のコラム「解答乱麻」に掲載されていた「パッカーズ寺子屋塾長」木村貴志氏の下記見解が目にとまり、この問題の核心を捕えた内容であるとずっと頭の隅にあったのだが、この度皆さんには以下の木村氏の意見を是非ともご紹介したい。

15.10.20 守山裕次郎

いじめによる自殺が起きる度に、校長たちは言質を取られぬよう官僚的答弁に終始し、担任は体調不良で姿を消し、評論家は学校や親のあり方をここぞとばかり非難する。そして、ほとぼりが冷めれば、人々は何事もなかったかのように、見て見ぬふりの日常に戻る。『次郎物語』の作者、下村湖人は、次のような言葉を遺した。「恐るべきは少数者の暴力である。しかし、一層恐るべきは、多数者の無気力である。われわれは、前者が常に後者の温床において育つということを忘れてはならない」(『心窓去来』) 私たちは「多数者の無気力」といういじめの温床を醸成せぬ教育をしてきたのであろうか？

戦後70年にわたって教育に欠けていたのは「プリンシプル」の教育だ。国籍・宗教を問わず、人間を人間たらしめるのは、人としての行動規範(プリンシプル)だ。わが国に伝統的にあった「人としての道」を海外に明確に発信したのは、新渡戸稲造の『武士道』だが、その根底に流れている一つが「儒学」の精神だ。幼い頃から五常(仁義礼智信)の徳を養い、五倫の道(父子の親、君臣の義、長幼の序、夫婦の別、朋友の信)を身につけ、人格を磨くことが尊ばれた。こうした教育は「素読」や「物語を読むこと」を通して、子供の情緒に沁み込むように教えられていた。

戦いの物語にしても、武勇と正義に胸躍らせつつも、敗者の心の痛みや哀しみにも思いを致すことが大切だ。人間の心の複雑な動きを感じ取る体験が、子供の心と人格とを育む。このような教育を失ったから、私たちの社会は「まごころ」や「思いやり」を失い、甚だしきは激情に駆られ、親殺し子殺しをする禽獣の如き者をも生み出した。

もう一つ欠けているのは、「尚武の気風」だ。戦後70年にわたって「武」を

尊ぶことは非難されてきた。国家権力は悪だと指弾され、警察も自衛隊も正義の「力」の行使ができず委縮した。学校も同じだ。何かもめ事を起こせば、喧嘩両成敗の名の下に正義は葬り去られる。道義や弱き者を守るために闘っても、非難されるだけなら教師も生徒も見て見ぬふりをするのが得策だ。中学生にもなれば腕力もついてくる。教育の場であれ何であれ、「力」を制するためには同等以上の「力」が必要であり、「力」を使わずに抑止するには、強い「気迫」や「胆力」が必要だ。それらなくして、いじめられている子どもを守るなどではしない。

尊厳が「暴力」によって踏みにじられようとするとき、抗う「力」と「勇気」が必要だ。「力」で敗れたとしても、尊厳を奪われぬ意思を示すことが人の人たる所以だ。「力」を「暴力」にせぬためには得を高め、胆力・勇気、自制心や忍耐力を磨いておかねばならない。幼き頃からプリンシプルを確立する教育が必要なのだ。それが「多数者の無気力」や「利己的無関心」に付ける唯一の薬となる。

「社会生活において、悪の力が本来善よりも強いのではない。悪人の無遠慮な団結力や行動力が、善人の利己的無関心さや孤高を装った卑怯さに打ち勝つのである」（『心窓去来』）

こうも書き遺した下村湖人は、中学の校長でもあった。こうした深い人間観と教育哲学が、現場の教育者から失われたこともいじめの遠因だ。教育の成果を偏差値や進路という物差しだけで見るのではなく、一人ひとりの心の育ち方や人格の成長をこそ丹念に見るべきだ。それは表情や態度や言葉に表れる。子供を見る深さは、親や教師の人間観の深さに比例する。真摯に学ぶべきは私たち大人なのだ。

パッカーズ寺子屋塾長 木村貴志

以上